



明治19年に東北本線が開通して上野-黒磯駅が結ばれ、関東北部・東北の近代化が進められた。那須駅(現・西那須野駅)が現在の位置に開業した背景には、大山公爵の力が働いたともいわれている。

日本の近代化を目指して

当時、西洋列強の圧力により植民地化の危機に晒されていた日本。独立を守ろうと、富岡製糸場や八幡製鉄所の設立など殖産興業に力を注ぐとともに、鉄道敷設による国土開発が進められた。また、農業の近代化と生産性の向上も課題の一つ。西洋



明治貴族が描いた夢

日本が近代化へと舵を切った明治初期。時の政府を主導していた華族たちの情熱は、ここ那須野が原の地に注がれた。若き日に大海原の先で見た西欧への憧れを胸に、日本を発展へと導いた彼ら。彼らがつかもうとした夢は、今もこの地に眠っている。



あおき しゅうぞう
青木 周蔵 子爵
外務大臣。明治元年にドイツ留学し、ドイツ公使となる。明治14年に青木農場を設立し、私立青木尋常小学校を農場内に開設した。

から農機具や家畜などを導入し、農業の近代化が図られていった。そんな中、広大な平地を有するこの地に目をつけたのが、若かりし頃に西洋へ渡り、当時政権の中枢にいた華族たち。彼らが出資する大規模農場が明治13年から次々と設立され、那須野が原は本州最大の華族農場群を形成するまでとなった。日本の近代化を達成しようと、那須野が原に注がれた華族の情熱。その裏には、若き日に留学先で目にした広大な土地を有する欧州貴族への憧れがあったのかもしれない。

この地を愛し、この地に眠る

農場の開設にあわせ、華族の別荘も続々と建てられた那須野が原。レング造りの玄関が特徴的な洋館と薩摩屋敷の日本家屋が併設する大山記念館は、当時を今に伝えてくれる。薩摩藩士として生まれ、青年時代には戊辰戦争で各地を転戦した大山巖公爵。その後、渡欧し、4年にわたる近代軍制を学んだという。生まれ育った故郷への郷愁と、西欧への憧れを詰め込んだ別荘で人生の最後のひと時を過ごした大山公。ここ那須野が原を愛し、この地に葬られることを望んだ彼は、今や紅葉の名所となった参道の奥で静かに眠っている。

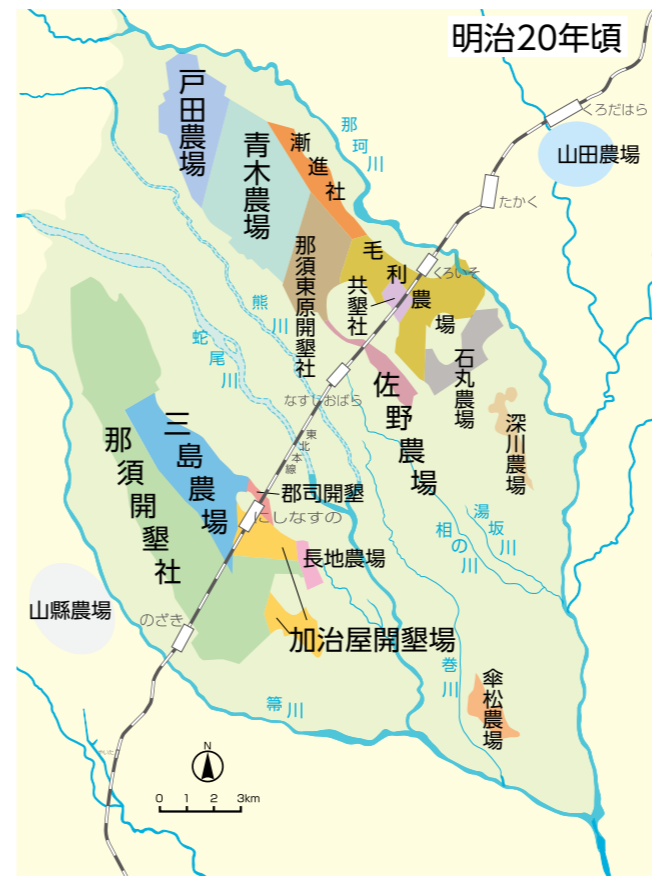


おおやま いわお
大山 巖 公爵
元帥陸軍大将・陸軍大臣。西郷従道と明治14年に加治屋開墾場を創設し、その後大山農場を開設。なお、西郷隆盛の実弟・従道と大山はいとこの関係。



下永田地内の大山の墓所を参拝する多くの人々。この地を愛した大山は、没後に東京で国葬が執り行われ、その日のうちに東北本線で西那須野に運ばれた。

墓所に整備された参道の両側に植えられたモミジ。見事な朱色に染まり、多くの人を魅了する。



拓かれた大農場の数々
長い杉並木を抜けると視界は一気に開け、青空の下に白亜の建物は全容を現す。今にも日傘を手に貴婦人が姿を現しそうな洋館は、明治政府で外務大臣を務めた青木周蔵子爵が残した別邸だ。ドイツ貴族に憧れ、広大な敷地で林業と牧畜、米や麦などの複合農業を営みながら、鹿狩りを楽しんだという青木子爵。他にも、総理大臣を務め、日本銀行を設立した松方正義公爵の千本松農場、陸軍大臣・大山巖公爵と海軍大臣・西郷従道侯爵による加治屋農場。日本赤十字社の初代社長・佐野常民伯爵による佐野農場など、明治期に入ると那須野が原には華族による大農場が次々と設立していった。

国を動かした華族たち

明治17年から昭和22年まで存在した特権的身分。公家や大名家、国家への勲功者には公爵・侯爵・伯爵・子爵・男爵の5爵が授けられ、貴族院議員への就任や財産の世襲などの特権が与えられた。左は明治20年ごろの那須野が原。農場を開設した華族の姓が、地名として今に残ったことがうかがえる。

明治元年から満150年を記念し、今年から見学エリアを拡大している。見れなかった貴重な遺産を、この機会に訪れてみてはいかがだろうか。



那須拓陽高校の敷地に建つ大山記念館。大山農場で焼いたレンガが、素朴で重厚な印象を醸し出している。